

市民学習会：第58回戦後教育史を学ぶ 永井正取さんのライフヒストリーを聞く みんなで作った榛名高校

—ヨイトマケの唄が私の原点—

〒371-0026 群馬県前橋市大手町3-1-10 教育会館内

TEL & fax 027-235-8876

‘09. 9. 1 発行

ぐんま教育文化フォーラム発行：編集/橋本寛文

6月20日(土)午後1時半より前橋市
総合福祉会館で、標記のテーマで永井正取
さんのライフヒス
トリーをお伺いし
ました。

戦時中飛行場建
設の飯場で8番目
の子として生まれ
た永井さんは経済
的に苦しい家庭に
育ちました。小5

のときの山口先生は豊かな子も貧しい子も分
け隔てなく、民主主義を肌で教えてくれた
といえます。バイト漬の大学時代、妹の学
資まで稼ぎました。榛名高校で教員生活を
スタートさせましたが、旧態依然の職場の

改善に挑みます。若い同僚と下宿持ち回り
の読書会で勉強しあい、志を一にする教職



員と職場協
定をかちと
りました。教
員も生徒も
育って行き
ました。文字
通り榛名高
校は「学校」
でした。

お忙しい方は、10pの6.民主的な学校づ
くりを励んだ—榛名高校時代—からお読み
ください。尚、正確さを期すため加筆・訂
正、付記、最後に「申し合わせ事項」があ
ります。

目	次
1. ともかく貧乏だった私の家……………2p	7. 圧倒的な少数派……………18p
2. 「山口先生」になりたい……………4p	—前商時代の苦闘—
3. 60年安保 忘れられない国会デモ…6p	8. 朝鮮への加害責任とハンセン病問題 21p
4. バイトで明け暮れたノンポリ学生……8p	—最終解決が私のライフワーク—
5. 「正取が高校の先生になった」……………10p	9. いまも聞こえるヨイトマケの唄……………23p
6. 民主的な学校づくりに励んだ……………10p	(付) 学校長と分会との申し合わせ事項
—榛名高校時代—	(1979年3月現在)……………30p

司会:開会が遅れました。私たちの見込み違いで、こんなにたくさんの方々にお集まりいただけようとは思っていませんでしたので、椅子が足りなくて、貸せないというのを強引にお借りするのに時間がかかってしまいました。お許してください。早速始めたいと思います。実は、先日自宅に電話がありました。永井先生のお話を聞きに行きたいのだが、当日仕事があり参加できない、ついては花束を贈りたいのだが、というものでした。お気持ちだけいただきますと返事しておいたの



ですが、今日、鍵を受け取りに受付に行きましたらそこに飾ってある花籠が届いておりました。この会は今月から7年目に入りますが、花籠が届いたのは初めてです。そしたら他にもいっぱい花束が届いているのですね。すごいですね。

私共は群馬県高校教育研究所を5月末の総会で“ぐんま教育文化フォーラム”と改称しました。代表に挨拶してもらおうと思ったのですが、永井先生のご用意くださった資料が足りなくなったものから急遽印刷しております。なので、休憩後の後半の始めのところで挨拶を考えております。よりしくお願いします。

1. ともかく貧乏だった私の家

平野: (韓国語で) 私は東洋大学の平野と申します。教職課程を担当していますが、去年の秋から韓国語を勉強し始めました。それで、今日は試しに使ってみました。拙いハンゲルで失礼しました。

今日は永井先生から、ライフストーリーをお伺いいたします。永井先生から「私の歩んできた道」という資料が皆さんのお手元に届いていると思いますが、私もこのコピーを事前に読ませていただきましてあることに気づき、調べてみました。資料にお母様のことが書か

れていますが、女工として働いていた会社名が「東京モスリン」とあります。ちょっと気になる名前でしたので調べてみると、現代史の生き証人の一人であることが分かったのです。この「東京モスリン」で働いていた高井としをさんが『私の女工哀史』1980年に草土文化から出版しています。この人物が何者かと申しますと、『女工哀史』の著者細井和喜蔵さんの奥さんで、女工をしていた彼女が生きた資料を提供して、高校の日本史にも登場する『女工哀史』を細井さんが書くことが出来たのです。その現場にお母さんはいらしたのです。お母さんは明治35年生まれ、6歳の頃から女中見習いの奉

公に出たとありますが、どんなご家庭だったのでしょうか。

永井:お袋は男みたいな気性の持ち主でしたが、苦勞の連続で子どもの頃の話は私はあまり聞いていませんが、姉の自叙伝『鼻の下に往来あり』によりますと、玩具で有名な栃木県下都賀郡壬生町の農家出で、親父とケンカすると60歳になっても壬生まで逃げて帰りましたから、(笑)私は2度くらい迎えに行ったことがあります。

平野:6歳で奉公に出るといのは兄弟も多かったのでしょうかね。

永井:はっきりは分かりませんが、貧しかったようです。

平野:私の祖母とほぼ同年代なのですが、東京の下町生まれなのですが、小学校は2年までで木更津の旅館に奉公に出ているのです。お母さんの場合は入学もしないで奉公に出ているのですから、当時としても珍しいことかもしれませんね。義務教育の普及率は明治の末辺りにほぼ100%になっているのですね。就学率が100%近くなったということは、いったん入学すれば就学率にカウントしたので、そういう数字になったのかもしれませんが。ですから、実態としては入学はしたけれど義務教育年限をすべて全うできなかった子どもたちがかなりいたということでしょうね。最初女中見習いということで奉公されていますが、戦後しばらくは女性の就職先としてあったのですね。その後、大工のお父さんと結婚されたという

ことですが、それはいつごろでしたか。

永井:関東大震災の直後、壬生の親戚のものが心配して訪ねてみたら、東京の深川で所帯をもっていたというのですから、大正12年のことですかね。1902年生まれますから、二十歳前後で結婚したのだと思います。私にはそういうことに関しては何も話してはくれませんでした。字はカタカナしか書けませんでした。「永井」という姓も書けなかったようです。

平野:永井先生ご自身は1943年、9番目のお子さんとしてお生まれになったのですね。空襲には遭われていますか。

永井:親父は軍の仕事で千葉県の旭市(現)干潟町の傍の飛行場をつくる飯場にいましたので、私はそこで生まれました。おそらく朝鮮人を使役して飛行場を作っていたのだと思います。

平野:軍の仕事をしていたということで戦後は仕事が無かったのではないですか。

永井:私の記憶では極貧の生活でしたから、ほとんど仕事は無かったのではないのでしょうか。親父は結構腕の良い大工だったらしいのですが、仕事のない日は朝から酒を飲んでるようなしょうもない親父でした(笑)。それに、親父の弟が戦死してしまい、その奥さんの生活の面倒を見ていたのですが、そのうち懇ろになり、入り浸ってしまうようになりました。ですから、長男・次男はそれを嫌って何年も家に戻りませんでした。私にはその理由は分かりませんでした。戦中の出来事ですが、姉に聞いた一番衝撃的な話

はお袋が相手の女を殺して私も死ぬ、松本駅で諏訪湖に飛び込んで死ぬと大騒ぎを起こしたというものでした。当時は長野県松本市の浅間温泉に朝鮮人を使って日本銀行の地下工場を作る仕事をしていました。そんなことで、物心両面でお袋はとても苦労したと思います。

平野:ご長男は兵役には？

永井:長男はギリギリ、海軍に行っていますね。敗戦直後、苦労は重なるといえば重なるのですが、その後、向島の反対側日本橋の飯場に移るのですが、その後、小平市、当時は東京都北多摩郡小平町に移り、小学校に入りました。私の家のすぐ前に一橋大学がありました。小学校まで3 kmくらいありましたが、通学道路は未舗装で草茫々でしたから草を結んで引っ掛けると転ぶ仕掛けなどをつくりして登校していました。雑木林もいっぱいあり、カブトムシも採り放題でした。小平第二小学校です。小学校の入学式は忙しいお袋に代わり姉が付き添ってくれましたが、ゾウリ袋が買えずに私だけ持っていなかったことが恥ずかしく、泣きたい気持ちだったのを覚えています。

2. 「山口先生」になりたい

平野:その学校で素晴らしい担任の先生との出会いがあったと伺っていますが…
永井:当時、私の家だけが貧乏だったという気はしていないのですが、それでも、給食がない時代でしたから、麦混じりの

弁当を持って行きました。他の子たちはみんな白米で、私は恥ずかしくて弁当を腕で隠しながら食べていた記憶があります。でも、兄や姉は麦飯すらなかったとっていました。学校の集金日に間に合ったことはまれで、名前を呼び出されなにかいつもびくびくしていましたね。それから、私の家には傘がないので苦労しましたね。雨がふると休もうと思ったのですが、叱られるので、途中の公民館のようなところで、兄妹と一緒に雨が止むのを待っていた覚えがあります。他にも傘を持たない近所の小学生何人かも一緒でしたね。青っ漬を拭くためにテカテカに光った服を着て、それでも元気に学校へ通いました。

5、6年生のときの担任は山口先生という若い先生でした。この先生は何かを決めるときはすべて生徒の投票で決めさせました。学級委員や学芸会の出演者を選ぶときも投票で決めました。今までは俺たち貧乏人の子は学級委員などにはなれませんでした。私はクラスで一番の成績をとったことはありませんでしたが、いつも二、三番でしたし、相撲取りにでもなろうと思ったくらい体格が良く喧嘩も強かったので、選挙すると選ばれてしまうのです。身体に反して性格が優しく、当時の私は“おかさん”と呼ばれていました。男の子なのに「お母さん」という意味でした。(びっくりした笑) “おとさん”は大西君でした。学芸会ときには主役に選ばれました。機関

車役でした。

それから、先生は算数の問題を黒板に書いて「おおい、出来たら外で遊んできていいぞ!」とよく言いましたね。一生懸命にやって先生に〇を貰って、教室を飛び出していく…、楽しかったですね。



それから、みんなが好きでない算数の時間などには校外学習とか言ってみんなで探険に行ったり、ソフトボールをしたりしましたね。そういう先生でしたから大人気でしたね。でも、私とその先生が好きだったのは、朝、世の中で起こっていることを私たちのも分かるように噛み砕いて“きょうの一言”みたいなコメントを必ずするのです。正しいこと、先生方がこんなことをしているなどを話してくれて、なにか目が開かれていくような気がして楽しかったですね。

もう一つは、先生が宿直のときに子どもたちが米持参で泊まりに行くのです。今回はこの部落の子、次はこの地域の子というように…、これが楽しくてね。先生は怪談話を沢山知っていて、部屋を真っ暗にして私たちを嚇かす話を聞かせてくれるのですが、みんな怖さ半分胸をドキドキさせて聞き入るのです。そして、度胸試しで校内を1周させたりするので

すね。それから、この先生は酒が大好きで、学校のすぐそばに酒屋があるものだから、子どもに「買って来い」とお金を渡すのです。酒屋の小父さんもそれをよく知っているものだから心配して、3合という2合しか売ってくれないのです。

先生は3合買って来いと言ったのに2合ですから、困ったお使いは途中の井戸で水を足して3合にしたりしてね。(大笑)先生にはすぐ分かるのですが、

とくにとがめだてなんかしませんでしたね。女の子たちは危ないからと一切泊りませんでしたがね。男の子たちは順番で泊りにいきました。

平野:幾つくらいの先生ですか。

永井:たしか、その年に隣の担任の塩川先生と結婚したのですから28歳でした。髪を7:3に分けて、いつもポマードできちんと整髪していました。カッコ良かったですね。

平野:そうすると、このときは‘55、6年ごろですね。戦後に教員になられているわけで、戦後新教育をそのまま実践していたような感じですね。学校では目立っていましたか。

永井:いままでの先生とは全然違ったタイプでしたからね。それから、六年生の時に、何を思ったのか、親父が修学旅行に付いてきたのです。日光だったのですが、俺は日光に行ったことがないからどうしても付いていきたいと言い出して(爆

笑) 強引についてきてしまったのです。付いてきたばかりでなく、酒が好きだから、夕食のときに先生と一緒に酒を沢山飲んで、「今日はオジサンがラジオ体操を教える」と言い出して、やりだしたのです。そしたら山口先生もそれに加わって、酔っ払い同士が大食堂で始めた。付いてきただけでも子ども心にも嫌なのに、この有様でしたからアナがあったら入りたいというのはこのことでしょうね、顔が真っ赤になったことを記憶しています。

でも、山口先生がいたので私もこういう先生になりたいと考えるようになったのかもしれない。

平野: 中学校の頃には少し暮らし向きが楽になってきたとお伺いしていますが、何か変化があったのですか？

永井: 高度経済成長期に向かっていましたが、個人住宅向けの大工になり、兄貴たちも親父との軋轢はあったものの、三人とも戻ってきて仕事も少しずつ増えていったようです。しかし、すぐ上の兄は非常に喧嘩が強く、当時プロレスで活躍していたメキシコの巨象、オルテガというレスラーがいましたが、そのオルテガという綽名が付いていました。その兄は学校一勉強ができたのですが、高校へは進学できず、海上自衛隊の少年自衛官に応募しました。教徒の舞鶴に旅立つ日、つぎあてのある学生服を着て、何回も何回もこちらを振り返りながら駅に向かった寂しそうな兄の姿を忘れることは出来ませんでした。

私が高校へ入るのが 1959 (S34) 年ですから、その 2 年前ではまだ高校へ進学させられないくらいの暮らし向きだったのです。私の頃は 6 割くらいが高校へ進学していたと思います。

3. 60年安保 忘れられない国会デモ

平野: ということでは先生が初めて高校へ進めることになったのですが、どういう経緯があったのですか。

永井: 私から頼んだ覚えはないのです。学校一勉強のできた兄貴を高校へやれなかったことを親父やお袋は可哀そうなことをしたと思っていたのではないですかね。

平野: その高校でもユニークな先生との出会いがあったようですね。

永井: 高校での私はほとんど野球尽くめの生活でした。硬式野球部で朝から晩まで野球漬けの毎日でした。そういう中で、高2の6月、ある先生が突然「俺はしばらく学校へはこないから、会いたかったら国会へ来い」(笑)と言ったのです。私は三鷹高校の11期生ですが、当時は安保闘争でデモが盛んでしたし、電車もよくストで止まっていたね。HRで「安保は戦争への一里塚」なんて議論をしたのを覚えています。昨年から土肥校長が都教委の「職員会議での採決不可」に抗議して闘っていますね。今年3月に定年退職して、4月から再雇用制度を使って教員として働こうと思ったら不採用になったということですね。

6月15日、樺美智子さんが虐殺された日は電車が止まって学校へいけないので、私は野球部の仲間と一緒に「見に行くべや」といって、まだデモに参加するまでの意識はありませんでしたから、自転車ですら有楽町まで行きました。このときの光景は今でも目に焼きついていますね。道幅いっぱい広がってデモ行進している光景です。フランスデモというそうですね。異様な感動をおぼえました。これも私の原点の一つになったと思っています。帰ってからクラスで報告したらみんなも感動していましたね。前橋の高校生がデモをしている写真を見ることがありますから、それに比べれば私たちは未成熟でしたね。それでも「60年安保」は他のものとは全く違った景色として記憶に残っています。

それからもう一つ、野球漬けでお袋からもすごく怒られたことがありました。5月の連休のときでした。あんなに苦労したお袋が、犬にひっぱられて足を骨折して動けなくなったのです。で、この日だけは野球を休んで、お勝手をやってくれと頼まれたのです。それなのに、私はキャプテンでしたから、練習試合を休むわけにはいかないと云ったら怒りましたね。「分かった。これからはお前さんには何もしてやらない。お前さんは私の子ではない」と。その後約5ヶ月間にわたって洗濯は私のものだけ残してあるし、食事もなし、徹底的でしたね。

平野:言うだけでもすごいのにそれを実行するのは並大抵ではありませんでしたね。それでどうしていたのですか。

永井:妹がおにぎりなんかを作ってそつと差し入れてくれていました。当時は見習い大工を何人か使っていましたから、大勢で食べていたのですが、私の分だけ完全に除外されていました。俺の飯だけ一切なかったのです。これにはさすがに参ったですね。家の貧しさから高校進学を諦め、家計を助けるために働く兄や姉の苦労も忘れ、野球に現を抜かす私への戒めだったと今は思っています。当時も、(母の気持ちは)分かっていたのですが、若気の至りでしょうか、野球をとってしまいました。

平野:その高校で進路について具体的に考えるようになったということですが…

永井:これも両親に大変叱られたのです。「お前は大工になるのだから工学部に入るのなら大学に行ってよい」といわれたのですが、私は数学が苦手な赤点だったので工学部に行くことは不可能でした。理科、物理は特にダメ。大学には合格しましたが、数学の単位が貰えなくて卒業できない事態が起こっていました。数学の教師が非常に厳しい人で、点をくれないのです。ちょうど野球部には私と同じのが何人かいて、「おい、先生には赤ちゃんができたらしいからお守りをするともしかしたら点がもらえるかもしれない」というので、一週間ほど家庭学習の期間にお守りに通って、奥さんを口説

いて、やっと単位を貰いました。何故単位をくれなかったかといいますと、試験が出来なかったのは勿論ですが、数学の時間に「内職」をしていたからなんです。私たちが文系は理系の時間はもっぱら日本史や英語の勉強をしていたのです。何しろ間にあいませんから、理系の時間は私にとっては「自習時間」だったのですが、先生はそれを絶対に許さない方だったのです。奥さんの機嫌をとればというのは先輩からの申し伝えだったようです(爆笑)。懇々と「内職」をしなければならなかった理由を説明し、しかし、先生の心を傷つけてしまい大変申し訳ないことをしたと反省している旨を伝えました。杉並の阿佐ヶ谷まで一週間通ってその甲斐あってかやっと単位を貰いました。ですから、理系に行く気はさらさらなくて、教員になるために教育学部を受験しました。そうしたら、両親ともものすごく怒りましたね。私を跡継ぎにしたかったようです。でも、兄たちが大工をやっているのに、大学を出たからといって私が跡継ぎというのも…ありますし、でも、大学まで出してもらったのは夢のようでありがたかったですね。

4. バイトで明け暮れたノンポリ学生

平野:ご兄弟の中でただ一人、しかも私立に行かせてもらったのですね。

永井:文系なら一橋大へ行けといわれたのですが、家が近いからでしょうね、で

も、ものすごい難関校だということを知らずに一時はその気になったのですが、受験科目に理・数がありますから、これはダメですね。

で、私大へ行きましたが、あまり授業を受けた記憶がないのです。というのは、お袋が脳溢血で倒れまして、妹も高校受験ということで基本的には家のこと特に朝・夕食は私がおさんどんしました。だから飯炊きは上手いものでしたよ。大工だから廃材はいくらでもあるから燃木には不自由しませんから、かまどで飯炊きをしました。それと、金がないということもあつたし、妹の学費は私が出そうと思っていましたからアルバイトに明け暮れた4年間でした。サークルに入らなかったのが決定的に大学時代の思い出を薄いものにしましたかね。

大学時代の試験はみんな平然と不正行為をしていましたね。私は赤点を助けてもらったことはありましたが、いままで不正行為したことは全くありませんでしたからびっくりでした。それに、感動を受けた授業が一つもなかったですね。これは聴くほうに問題があったのかもしれませんが、大学の4年間は高校時代までに蓄積した知識を全部捨てた4年間でしたね。(笑) その代わりに、アルバイトではずいぶんお金を稼ぎ、家計を助けたと思います。両親をプロ野球や相撲の観戦、歌舞伎などにも連れて行きましたし、親父がはじめて買った乗用車を運転して旅行へ行ったこともあります。一番長く勤

めたのは荻窪にあった大商証券という証券会社で、一部上場とか二部上場とかの企業名が黒板にずらっと書いてありまして、そこにイヤホーンで短波放送を聴きながら株価の値段を書き入れていく仕事です。午前の部と午後の部がありますが、どうして大学があるにも関わらずアルバイトにいったのが良く分からないのです。いつ学校へ行ったのでしょうかね(大笑)。ですから、株の動きは良く分かるようになっていまして、大商証券に就職しないかと強く求められていました。そういうバイト漬けでしたから、近々大学時代の同窓会があるのですが、本当に大学ってつまんねえナと言っていた5人だけ仲が良いのです。おそらく、大学の空き時間に近くの雀荘でマージャンでもしていた連中なのですね。それだから、専攻の日本史をしっかりと勉強したことがないのが、少し後ろめたいような気がします。失うものが多かった大学4年間でした。

平野:株に詳しくなったということですが、ご自分で買われたことはないのですか。

永井:それはまったくありません。儲けるほどの資金はないですし、個人的にはそういうことは好きではなかったですね。

平野:そういうことで卒業し、いよいよ教員になるのですが、それは休憩を挟んで後半にお伺いすることにしましょう。

*****<休憩>*****



瀧口代表:こんにちは、今日は沢山おいでいただきまして嬉しいかぎりです。先ほど「あなたもぐんま教育文化フォーラムへどうぞ」を配らしていただきました。先

日までは「群馬県高校教育研究所」と名乗っていましたが、5月末に「ぐんま教育文化フォーラム」と名称を変更しました。それは、高校教育だけにとらわれず、もっと広く教育や文化の問題をみんなで話し合ったり、楽しい催し物などを沢山企画したいということでリニューアルしました。今日の「戦後教育史を学ぶ」は教育制度・政策部が足掛け6年、7年目に入ったシリーズものです。毎回、戦後教育史学習会ニュースとして小冊子を刊行してきました。57号まで出ています。また、今日はお持ちしませんでした。年4回、私共のニュースも発行しています。読んでみれば面白いので次回も必ず読みたくなるニュースです。会員にだけお届けしていますので、「ぐんま教育文化フォーラム」にお入りになってこちらを読んでいただきたいと思います。会費は年間3,000円なのですが、教育会館に事務室を借りていますのでその費用や活動費に当てています。私たちスタッフは勿論ボランティアです。きょうはお花まで差し入れられていますが、さすが永井

先生の人徳だと思っています。ぜひ、私たちの仲間になってフォーラムを支えていただけたらと思います。(拍手)

5. 「正取が高校の先生になった」

平野:いよいよ大学を卒業されて、教員採用試験を受けられるのですが、なぜ東京は受けていないのですか。

永井:この頃には親父はすっかりアルコール漬けで、素面の親父と話を出来るのは早朝だけでした。もう朝5時には起きて飲み始めるのです。病院に入ったときもそうでした。2階の病室にいたときには寝巻きを縄状に撚って脱出したこともあったくらいでした。そのくらいでしたから諍いも絶えず、申し訳ないけれど家から出たい、それが一番だったかもしれませんね。で、高崎に高高出身の野島君という友達がいる、何度か群馬に遊びに来たことがありました。群馬なら1日で東京へ帰れて、関東では一番遠い、そんなことから群馬の採用試験を受けたように思います。そういう単純な理由です。ただ、妹には迷惑をかけたと思っています。私が出た後、妹は2年間くらい家事をして、そのあと保育士になるための学校へ行き、つい最近まで小平市の保育園に勤めていました。本当に喧嘩の絶えない家でしたから、親父と兄たちに挟まれて妹は大変だったと思います。親父は飲べーで、しかも家より外が好きで帰ってこないことも多かった。長男・次男は酒

を一滴も飲まないですからね。「正取は親父が大嫌いなはずなのに大酒のみになってどうしようもない」といつも言われましたね。それから、私は職人や下職の鳶とか左官と仲が良かったので親父に見込まれたのでしょね、「正取、お前が永井工務店の跡継ぎ」というのが親父の口癖でしたから、私が小平にいれば兄貴たちの手前都合が悪いという事情もありました。大学まで出してもらって申し訳ないけど、ともかく家から逃げたい一心、だから、生徒で親から逃げたいという奴がいましたがその気持ちは私には痛いほど良く分かりましたね。(笑)もう、緊急避難的にですが、家には居たくない。でも、家から離れてみて、親父が病気になったときや、とりわけお袋には悪いことをしたという気持ちはずっとありました。でも、両親は貧乏人の息子が学校の先生になったことがとても自慢だったらしく、「今度、正取が高校の先生になって群馬に行くんだ」と嬉しそうに合う人ごとに話す姿が私には面映く感じられましたが、苦勞した両親の手前「やめてくれ」とは言い出せませんでした。

6. 民主的な学校づくりに励んだ

— 榛名高校時代 —

平野:千葉と群馬に合格し、結局、榛名高校で教員生活をスタートさせることになりました。どういう学校でしたか？

永井:行った当初は女子高校が母体の県立高校の慣習が色濃く残った学校でした。1940（S15）年にできた室田高等実践女学校が前身です。女子高の雰囲気が漂い、保守的で、地元の先生たちが多くて、私たちが入った頃には学年主任とか生活指導主事とかそういう人たちが皆学校長の任命で、職員会議でも若い先生方の発言機会がほとんどない学校でした。私の赴任する前後の学級増で若い先生方が10人くらい一挙に増えましたが、若い我々はそういう学校の体質が不満でした。

平野:いつ、県立高校に移管されたのですか。

永井:詳しいことは知りませんが、1948年の学制改革により群馬県立室田高等学校（男女共学）となり、1955年、群馬県立榛名高等学校と改称されたとあります。

学校長は1年か2年くらいで変わりますが、まるで新校長の修業の場みたいでした。その代わり教頭さんが実践女学校時代から何十年もずっと教頭のままでした。謹厳実直、人物的にはとても良い方で、私は仲人をしてもらったのですが、とても頑固で民主的な学校運営をしようという気持ちはない方でした。

私は日本史を担当しましたが、職員会議でいろいろ発言しましたから、煙たがられていたのでしょうか、定時制で日本史の授業が必要なのに私に兼務をさせな

いで、わざわざ地理の先生にさせたほどでした。そして、私は担任を希望しましたが、させてもらえませんでした。普通は2年目頃からさせるのですよ。私は3年間据え置かれましたね。やがて、萩原慧先生とか日向野克己先生とか島田篤治先生とか他の学校で冷遇されていた優秀な先生方が転勤してきて、若くて不満を持っていた先生方をまとめて、学校がだんだん変わっていくようになりました。

一方、私たち若手教員は「夜の読書会」を続けていました。これは、私が言いだ

しっぺだったような気がするのですが

15人くらいのメンバーがいました。当時はみんな下宿生活をしていましたから、その下宿持ち回りでやったん

ですね。その時のレポートをこれから廻しますが、何故これを持っているかというと、実はこれは私の連れ合いのものでして、当時彼女は定時制にいました。読書会を通じて恋愛をして結婚したわけです（笑）。これを見ましたら、68年から72年までの足掛け4年間にわたって、51回やっています。ですから、ただ不満を垂れていただけではなくて、勉強しようということで、『高校教師論』（竹田友三著 三一新書）とか『日米安保条約』、「勤務評定」の問題とか、鷗外その他の小説とかもずいぶん読んでいますね。1回ずつレポーターを決めて2週間に1遍



やっていました。こういうことが相まって、学校変革のエネルギーとなったのでしょうか。

平野:萩原さんたちが来る前から校長に煙たがられるようなもの言う新人であったのは何故ですかね。

永井:小学校時代や高校時代の先生の影響ですかね。私は社会科の教員になろうとしたとき、おかしいことはおかしいといえる教員になろうと考えていました。今日お見えになっておられますが、原田覚次先生を招いて「部落問題」の学習会もやっています。

平野:そういう意味では、初志を貫徹する場として若い先生方と学習会を始めたのですね。

永井:今日お見えの篠原八一先生ご夫妻も最後まで元気で高教組の一員でしたし、そういう方が多かったと思います。当時はいまほど管理が厳しくありませんでした。学校の近くの「はるみ食堂」が飲み会の場で、そこで飲んで4キロくらいの女子マラソンコースを誰が一番で戻ってこられるかを競い合ったものです。ほぼ毎回やっていましたね。1番になった人はその日の飲み代がただになるという特典がついていましたから、みんな真剣でした。長いこと町長をやっていたI先生もそのメンバーの一人ですし、校長になったIさんやTさんもそうでした。当時はモータリゼーションが始まったかどうかのときでしたから世間の目もゆるかったんでしょね。帰宅途中に川に落ち

た同僚がいましたが、別に問題になることはありませんでした。今は、夜中の自損事故を届けただけに懲戒免職になった先生がいましたね。宴会は図書館、好きな先生は引き出しに酒瓶が入っていました。部活が終わると、体育教官室に焼かれた鮎が待っていてみんなで飲むのが楽しみでした。鮎釣り名人のM先生が烏川で鮎を釣って焼いておいてくれるのです。あまりいい匂いがしてうまくないから遠慮してくれという話が定時制から来たこともありましたね。昭和41年から5年くらいまでは酒に関してはゆるかったのではないかと思います。

平野:そういう形で教員たちの親睦が深まり、しかも勉強しながら教師としての力量を高めていったのですね。それは当然、授業の取り組みなどにも反映してくると思うのですが、授業ではどうだったですか。

永井:今日は卒業生がいるからあまりウソは言えないのですが…(笑)。当時はヴェトナム戦争の真っ最中で、沖縄返還も大きなテーマでした。ですから、戦争と平和をずいぶん意識して授業に臨みました。反対集会にもずいぶん出ていましたから、集会で感じたことなどを生徒たちには必ず話そうと思っていました。小学校時代の山口先生と同じです。

榛名高校時代、所謂「文部教研」という官制研修が始まりました。これは新しい学習指導要領が出るとその伝達講習が行われるのですが、授業は全てこの学習

指導要領の枠内でやれということでした。それは「学校教育法」に書かれている「教育は教員が司る」に制限を加えるものですから勿論反対でした。

平野:ちょうど68年に改定になっていますね。

永井:高教組は何を教えるかは教師集団がみんなで討議して決めるもので、文部省の命令で学習の内容を決めるものではないという立場です。その伝達講習会は敷島公園の北側の総合教育センターを会場としておこなわれましたが、上からの命令で聞いてくるというような事には反対ということで「文部教研反対闘争」を展開しました。隣の松林に高教組の組合員が集まって反対集会を開いたのを覚えています。私も「文部教研」には出ないと管理職に表明しました。すると、校長か教頭かどちらであったかは定かではないのですが、母に「永井さんは校長の命令を聞かないで困っているからお母さんから何とか従うように言ってください」というような意味の手紙を出したのです。そしたら「コウチョウセンセイ ノ イウコトヲヨクキイテ イイセンセイニ ナツテクダサイ ハハヨリ」というたどたどしいカタカナの手紙が届きました。私はそのとき、カタカナしか書けないことを初めて知り、涙が止まりませんでした。おそらく鉛筆を舐め舐め、息子の行く末を心配して書いた手紙だと思います。妹が宛名を書いていた。でも妹は「負けるな！兄ちゃん、」と書いてきました。

(大笑) お袋の初めての手紙でしたが、お袋にこういう心配をかけてまで私を文部教研に行かせようとした管理職は本当に教育者なのか、管理職にここまでさせる教育委員会に教育を任せることは出来ないと心に刻み付けましたね。圧力には決して屈しないという思いが強まりこそすれ弱まることはありませんでした。その日から私の中では文部教研に参加しないことが教育者であることの証となったのです。ですから、榛名高校では上からの押し付けには従わず、生活指導でも成績の振るわない生徒の指導にしても一人ひとりの先生方が職員会議で意見を言い合って、みんな学年集団を軸にして、下から決めていく実践を積み重ねていきました。これは徹底していたと思います。今日は榛名高校の卒業生がずいぶんいますが、そこまでは分からなかったかもしれませんが…。

榛名町には一中から三中まであったのですが、統合中学に吸収され一遍にマンモス中学になりました。これは効率的であったのかもしれないけれど、生徒たちの学力も行動も大きな差が出来始めました。出来る子はどんどん出来るようになって高崎の高校へ競って進学して行きました。それでもいままで見られなかったような低学力の生徒たち、いままで見られなかったような先生を敵視する子どもたちがたくさん入学してきました。彼らは先生という存在を全く信じていないのです。榛名高校に入ってきた彼らを職員

室へ呼ぼうとすると「なんで職員室へ行かなければならねえんだ！」と目を三角にして抵抗するんです。用があるから呼んだだけなのに、この子たちにとっての職員室は怒られる場所だったんですね。

榛名高校の民主化が進むと同時に一方ではこういう子どもたちがどっと入ってきたのです。さらに、高崎から「逆流」してくる生徒たちもいるのですが、ほとんど同じ感じでした。中学時代によっぽど疎外されていたのでしょうね、「都落ち」といわれるわけですから。当時、玉村高校の生徒の「雨の日は好き」という詩がありました。雨の日はレインコートが着られて制服が隠せるから好き…と言う内容だったと思います。こういう学校間格差を象徴するような詩があつて、これを榛名高校の生徒に見せたら同じだということです。榛名高校の指導は日曜日でも高崎へ行くときには制服着用を義務付けていました。こういう生徒が統合中学になってから増えたのですね。ですから、私たちはこの子たちの現実をしっかりと見つけ、この子たちの側に立って彼らの生活の建て直しに協力していかなければ…という思いが先生方には強かったと思います。でも、「おれ、榛名高校に来てよかったよ、先生！」という生徒は前商より多かったような気がしますね。「中学時代は学校楽しくなかった」という生徒たちが卒業のとき「だって、オレたちの事を先生がかまってくれたもんな」と異口同音で言ってくれました。大変な思

春期を過ごしていたのでしょね。成績の悪い生徒の中には1-3ができない子がいるのです。1-(-3)はもっと分からない。中学一年の最初にやるのが理解できていなくて3年間過ごしたのですから、それはつらかったと思いますよ。しかも、マンモス学校で相手にされずに3年間ですよ。そういう子どもたちとどういふふうにつき合うのかずいぶん議論しました。その一つが、榛名高校としては初めて一斉家庭訪問をしたり、「高生研」から学んだ班活動を取り入れて生徒同士が教え合い学び合う活動を始めたりしました。これは、お亡くなりになりましたが、潮邦子先生を中心に行いました。そういう中でやる気を起こさせようとしたんです。また、バイクなんかは夢中になっている生徒たちにはもっと他のことに興味を持たせようと部活動に関心を向けさせたのです。こういうことを、みんなの総意で頑張ったのが榛名高校でした。

でも、時代は上からの押し付け教育を榛名にも導入してきました。きっかけは「日の丸・君が代」教育の強制です。卒業式に何が何でも「日の丸・君が代」を導入するといいだしたのです。先生方は同意できないと主張したのですが、学校長は職務命令で強行突破しようとししました。これを突破口として上からの教育を徹底する第一歩としようとしたのですね。そして、これを実現するために運動の中心になっている教師を転勤させて行きました。この動きは県下一斉に強行されま

した。

平野: 教員になられてすぐに学習指導要領の改訂があって「文部教研」が行われたとの話でしたが、その背景のことを考えながら聞いていました。68（昭43）年の指導要領の改訂では、特に日本史では歴史教科書に神話を入れるという改訂でした。それから「国旗と君が代」の指導を儀式に取り入れることが書き込まれています。ですから当然「文部教研」でもそれが中心になったのでしょう。それから、生徒たちの変化に関しては、この指導要領では「教育の現代化」が謳われていまして、詰め込みの元凶といわれる指導要領でもあったのです。

やがて、昨今批判にさらされた「ゆとり教育」に変えざるを得ないほどの詰め込みによる落ちこぼし教育が展開されたのです。ですから、それが生徒に反映して荒れにつながっていったことが今お話された状況を作ったのだらうと思われれます。そういう試練の中で永井先生は生徒が置き去りにされる状況と闘いながら教師のキャリアを積んでいったことは貴重な経験だったらうと思います。榛名高校に関しては以前、萩原先生から学力を回復する試みについて伺ったことがありましたが、70年代というのはある意味戦後の高校がもう一度教育の原点に立ち返って作りなおしていった時期なのですね。

永井: 現在の高校がどうなのかは分からないのですが、榛名では放課後に学習の

遅れている子の補習をしたり、班を作って子どもたちに自由に意見を言い合ったりさせました。これは教師のいうことを聞いてもらえるようにすることも大事ですが、子どもたちは子どもたちの中でこそ成長することを信じての実践です。障害児教育では、私たちより遥かに困難な中で子どもを着実に成長させていく実践がありますよね。それを見ると、成長の法則性のようなものを感じるのですね。都教組の松田先生は「子どもたちは天まで伸びる」とおっしゃっていますが、私たちが諦めないで子どもたちと付き合いました。そういう中で若い教師たちがどんどん育っていったのだと思います。そうやって育った教師は上からの押し付け教育が、どんなに言葉巧みに迫ってこようが、子どもを成長させないということを見抜いてしまうんですね。こういうことで、学校を民主化していくことイコール生徒が成長していく前提ということは教師集団の共通認識になっていったのです。しかし、国家のための教育を進める文部省や県教委にとっては好ましいことではないので圧力がかったのではないかと思います。いま、そういう生き生きとした現場が少ないとすれば、授業や部活やそのほかいろいろな場所で子どもたちに本当のことを話せているのだらうかと心配です。

平野: 職場の民主化と子どもたちの学力回復の取組みや班ノートを使つての集団化・学びあいの実践が成果を上げていた

ことを、79年の教研で報告をしていますが、その時の中心になることはどんなことだったのですか。

永井:その年の3月、榛名分会の17名が上毛会館に宿泊して分会教研を実施しています。次年度の榛名高校の教育計画をどう作るかの8本のレポートが出て、討議しました。「酒抜き」と書いてありますから(大笑)、酒を飲まずにやったのですね。私のレポートは「榛名高校の教育計画を立てるに当たって」(B4 3枚)で、全面的に展開しています。職場が働きやすいだけでは不十分で、働きやすい職場になれば、地域や生徒・父母に責任を負う教育活動を推進しなければならない、そういう立場に立つて方針を作ろうという提案をしました。そのとき私は分会長でした。一つは分かる授業、楽しい学校づくりについて、具体的には教科会議を行い授業を公開しよう、そして相互批判をしようではないか、それから、国語では朝、漢字テストをして学習の動機付けとして成功したけれど、数学や英語では何か取組みができないものか、そういうような提案がされています。それから、生徒同士の教育力を引き出す試みを意識的に実践する必要がある、民主的な人格を形成する分野では…などなど、かなり細かなことまで提案されています。PTAとの連帯、家庭訪問の充実、先ほど言いましたように、進学率は高まってくる中で、子どもたちの質の変化があるけれど、全ての子どもには発達の権利と

可能性があるし、その発達の筋道は法則性があると書かれています。そしてこの部分にアンダーラインがしてあります。

このように学校全体を私たちが動かしていこうという気持ちがありましたね。校長・教頭は1, 2年で変わってしまいますから、私たちが学校全体に責任を持とうというわけです。そういう組合活動が展開されていました。

平野:こういう教育計画を立てるときに通常は出来もしないことを並べ立てがちですが、榛名高校の場合には現実に実践している教育活動を分析し、研究し、それをまとめ上げて教育計画や目標を立てるだけの力量を教師集団がもっていたことはすごいことだと思います。

この70年代には群馬県の他の高校でもいくつか際立った教育実践が見られますが、そういうことを総合してみますと、教育実践のルネッサンスではないかとあらためて思っています。ですから、そこで新人時代をすごせたというのは、大変だったとは思いますが、貴重な時期だったと思います。その後まもなく榛名高校から出ることになりました。その具体的経緯はどんなことだったんですか。

永井:私が動くことを分岐点として3年間くらいで(メンバーが)ガラッと変わってしまいました。組合活動を担ってきた先生方はほとんど異動させられました。これは私たちの学校だけではなく全県下でやられました。特に「日の丸・君が代」に抵抗していたところが狙い撃ちされま

した。私は担任だったものですから、この子たちを卒業させてからなら異動もと考えていましたから、校長にもそう伝えていましたが、個々の学校の事情より県の方針が優先したのですね。それでも、1年目（81年）は校長の事情説明があって異動は止まりましたが、2年目は「私の手を離れた」と校長が嘆いたほどでした。それほどまでして「日の丸・君が代」教育を推し進めたかったのか、それとも榛名の民主的な教育集団と民主教育を潰したかったのか、おそらくそれは根っここのところにつながっているのです、おそらく両方の理由からだったでしょうね。

平野:それは81年ですね。この80年代の初めというのは「新学習指導要領」（78年）に移行する時期で、68年には「国旗と君が代」だったのが、78年には「国旗と国歌」に変わるのです。これを実施するのが80年代に入ってからです。それに合わせるような形で人事攻勢がかけられた。しかし、永井さんの場合、81年には異動が食い止められたのですね。その辺の事情を少し…。

永井:榛名高校の困難な状況は前年と変わっておらず、新しい2学年を編成する上で、生徒指導主事、新学年主任も異動、そういう中で永井は必要な人材だということは具申してくれたようです。実際、榛名高校への異動希望はほとんどなく、榛名高校から進学校など楽な職場への転勤希望は多いのです。内藤真治先生のように前女から玉村に異動希望を出す先生

は稀有の存在です。それなのに、困難な状況の中にわざわざ残って子どもたちと一緒に生活したいと望む私たちを動かす正当な理由はないはずですが、しかし2年目は聞き届けられませんでした。校長の人事意思を離れた人事異動など本来はないはずですよ。県教委は校長の具申権を無視して人事異動を断行したのです。

平野:それで、82年には前橋商業高校へ異動したのですね。それに対して抗議か何か…。

永井:永井は16年も居たから長すぎて榛名高校の水が濁るといわれました。

<平野:永井は長いと…(笑)>

一般論としては成り立つかもしれませんが、いつ私が水を濁らせたのか、その事実の説明がない限り、私は汚名を着せられて異動させられることになるわけですよ。極端なことを言えば最近話題になった「冤罪」ですよ。あと2年、この学年が終われば異動するというのが何故我儘なのか。榛名に転勤したい教師のいない中で残るのが何故水を濁すことになるのか。県教委は榛名の生徒や学校全体の教育力の向上などは、口では言いますが、腹の中では全然考えてもいない。萩原慧執行委員長を出している榛名高校分会を破壊して、「日の丸・君が代」教育を全県下に推し進めることを選んだのだと思います。ですから、榛名高校を去る離任式では「お世話になりました」とは言わないで、「わたしは榛名に残りたいけれど、残してもらえない」とはっきり言

いました。そういう県教委の教育を大事にしない姿勢を痛切に感じました。そして、このことは、前商にいて子どもたちにも言いました。「私の専門は日本史です。前商には日本史がないのに前商教育に役立てと転勤させられた。おかしいことだと思わないかい？」と生徒に言ったら、前商の子たちは明るいものだからバンバン拍手してくれて「先生一緒に頑張ろう」と言ってくれたのを覚えています。(笑) 私の代わりに前商を出されたのはIさんという卓球の顧問として優勝目指して頑張っていた方でした。彼も後2年間で良いから前商にいさせてくれと頼んでいたそうです。

平野: ということで、不当配転の異議申し立てをしたわけですね。

7. 圧倒的な少数派

—前商時代の苦闘—

永井: 前商というところは酷いところで、生徒じゃないですよ教員がね(笑)、こんなことがありました。転勤者には「4月1日に歓迎会をしますのご出席ください」という案内状が来るのですが、私には来ませんでした。どこから来るかという前商には「緑風会」という第2組合がありまして、教務主任クラスの幹部から届けられるのです。高教組組合員は約80名くらいの教職員のうち1割程度の少数でした。その招待状は高教組の組合員でもあまり活動歴のない人には届くのです。それだけではありません。一番参

ったのは、廊下であった若い先生や中堅の先生方が私を見ると回れ右して戻ってってしまうのです。勿論挨拶しても返事はありません。全くのネグレクトです。

(エッと驚きの声) 永井は前商に来るのがイヤで人事委員会に提訴して県教委に楯突いている、あんなヤツは前商の教員として相応しくないから挨拶をするなどというようなことがあったのですかね。半年くらい経ってから、Uターンした先生方から「あの時は悪かったいね。仕方なかったんですよ」とだいぶ謝られました。でも、私にはエライところに来てしまったと堪えました。いじめられる子どもの心理が身に沁みてわかりましたよ。

平野: そのときは何歳でしたか。

永井: 38歳ですかね。打ち解けて話せるのは分会の先生だけで、厳しいバリアが張られていました。20数年いましたが、本当に「窓際」でしたね。私の職員室の席はその間ほとんど変わっていません。通常は担任すると学年団の席に移り、担任が空けると無任所の席、つまり私の席の近くに来ます。そして翌年にはまた移動していく。私だけは何年いても定位置、まどぎわ。私は毎年担任希望を出し続けましたが、担任したのは2年間だけ。今日そのうちの何人かが来てくれました。この花を届けてくれたのもそのとき担任した生徒です。榛名のときは組合活動が忙しくて中々担任を持ってない事情もありましたが、前商では毎年担任希望を出しましたが全くさせてもらえませんでした。

組織的ネグレクト、敵視ですね。

平野:見せしめですかね。

永井:授業では明るく振舞っていましたが、内心では辛かったですね。でもその代わり、学校の組織的ネグレクトのご厚意(?)に報いるため、高教組本部の仕事をはじめ組合活動に時間を割かせてもらいました。(笑)

平野:提訴の件はどうなったのですか。

永井:15年くらい経って和解しましたが、待遇は変わりませんでした。これは前商という学校の特殊性かもしれません。第2組合、これは高教組に敵対し、文部省や県教委の教育政策を率先垂範する組織です。県下にはいくつもありません。

そんな中でも、前商の生徒はとことん明るいのです。転勤したばかりのころ、一番驚いたことは、教科書を読ませると、すらすら読んでしまうのです。榛名ではつかえて中々読み進められなかったことが、ウソみたいでした。というのは、疲れているときなど、一方的に講義するのは疲れるので、生徒に教科書を読ませて、一息つきたいことがあるのですよ。それがすらすら読んじゃうので休めないのです。学力差の実態ですね。前高などから来た先生は前商生は出来ないというのですが、私にしてみればここは天国ですよ。この明るい生徒たちとの接触が先生方から受けるネグレクトの辛さの一部を解消してくれましたね。(笑)

もた、もう一つは、職員朝会するとき、校長の方へ向き直って「起立、礼、お早

うございます」と挨拶するのです。私は絶対校長・教頭の方を向いては挨拶しないという抵抗を20何年し続けました。

I先生という数学の先生は起立をしなかった。そうしたら高体連のA理事長が、誰とは名前を言いませんでしたが「朝は毎日気持ちよく出発したいと思います。そういう光景が見られるのは残念です」と発言、だんだんI先生も立つようになりました。どんなにか悔しい思いをしたことだったと思います。彼はその後しばらくして教員を辞めてしまいました。私は、この起立した瞬間、2、3秒の異様な静寂と緊張と教頭の「お早うございます」の掛け声を聞いたたびに「よーし、今日も一日闘うぞ!」(大笑)と気持ちを奮い立たせていました。そうでもしないとやってはられない状況だったんですね。

平野:それは20数年いても変わりませんでしたか。

永井:基本的には変わらなかったと思います。

3つ目に入学試験の可否判定会議では筋を通す努力をしました。前商は運動部の強い学校ですから、推薦入試を重視しますが、推薦入試の枠を広げれば一般入試の枠は相対的に狭まります。ところが推薦枠だけでは足りずに、一般入試の枠内にも部活関係での繰り上げ合格への力が働くのです。推薦枠で採れなかった優秀な選手を合格させたい部活関係者から「特徴のない生徒を採るよりは点数は低いかもしれないが部活をしっかりとやって

いる者のほうが学校のためにもなっていないではないか」という発言があるのです。合格させたい選手の長所を挙げ、入試の点数を軽視して合格させようとする力が働くのです。そうすると、一般入試で受けた生徒で、本来ならば合格する点数を取った生徒が不合格となります。当初は相当ひどい逆転現象の記憶があります。そこで、毎年、内規を無視してはいけない、一般入試で合格ラインに入っている生徒を落とすことは出来ない、前商を出て、家業の跡継ぎを目指している自営業者の子はたくさんいる。それを運動選手のために犠牲にしているのかということを手を主張し続けました。前商は地元で根ざした伝統校ですし、余りの逆転現象は中学校側にも説明がつかない。だからこういう主張は次第に校内でも支持を得るようになっていきました。前商分会は弱小でしたが、この点では頑張ってきたといえますね。

平野:高教組の分会員が正論を言わなければ、通ってしまうのですね。いや、他の教師たちは誰も何もいわないのですね。

永井:「特徴のある子を入れることはいいことじゃないか。成績だけで採るのは良くないんじゃないか」などと初めて聞く人ならうなずくような発言をするんですよ。推薦入試があり、そこでは運動部の生徒は十分厚遇されて合格しているのに一般学力入学試験でもそういう発言が出るのですから、しっかり発言しないと入試の公平性が保たれない恐れを感じてい

ました。運動部の関係者はよく「前商のために…」といます。運動部の顧問にとっては実績を上げることは死活問題だという側面があるのです。彼ら同士の激しい競争があるのですね。実績が上がれば優秀な教員と見られます。そのためには優秀な選手がどうしても必要なですよ。でも、実際には、そうやって無理して入ってきた子も可哀そうなのです。成績にもものすごい落差がありますので、ついていくのが大変なのです。無理して入れなかったほうが良かったのではないかと思われる生徒も多かったように感じました。

平野:入れなかった子にも悲劇だったし、入れた選手にとっても悲劇であるという…

永井：私は美術部の顧問でした。絵の描けない顧問です。(笑)美術部は本当は伝統のある部活で、『タッチ』の作者あだち充は先輩です。美術部に入ってくる子は、前商ではマイノリティーで、前商の体育会系というかバンカラ体質が全く性に合わないという子も結構いるのです。入学前に学校見学などはしているでしょうし、情報は入手もして選んだのでしょうが、入ってみて違和感を思えたのでしょうね。前商では入学式や始業式は物音一つしません。昔の教育勅語奉読を彷彿させるくらいの異様な静粛さなのです。榛名高校ではいくら「静かにしろ！静かにしろ！」と怒鳴ってもワイワイがやがやでしたが、前商は違っていました。体

育や運動部関係の先生方が体育館で生徒たちを睨むだけで咳払い一つ出ません。しかしそれは自発的なものではなくて、その異様さから分かれるとおり威圧による静粛さなのですね。そういう体質がイヤな生徒にとっては「隠れ家」みたいな場所が必要なんです。美術部はそういう場所なのです。「帰宅部」の生徒にもいえますかね。パチンコなどがものすごく上手い子がいっぱいいましたよ。(大笑) 屈託なく「こんなに稼いだい」と自慢する子もいましたね。今日来ている男の子の一人は級長—前商ではクラス委員長のことをまだ「級長」というんですよ。「級長任命式」なんてものがある—だったのですが、そのうちの一人だったかもしれません。体育会系の雰囲気の中で上手く自分の空間を持っている生徒ですね。パチンコのプロがいましたね。「自動車の免許証を取るには40万円くらいかかるんだよ先生。オレはパチンコで稼いじゃった。運動部のヤツらは汗水たらして頑張っているけど、先生の名誉のためにやらされているんだんべえ、それよかパチンコですよ」と呆気らんかんとして言いました。(大笑) でも、彼らは前工にはかなわないといいますよ。「パチンコやマージャンは前工、前工にはかなわねえ。でも前工は先生がいいやねえ。」生徒と先生が上手くいっているんだそうです。「一見悪そうな格好をしてるけど先生と生徒が理解しあっているのが前工で、前商はうわべだけ静かで、先生のいうことを絶

対に聞かないのが前商だいね」(笑)。そうよく言ってましたけど、そういう中で、私たちは組織的には何にも出来なかったのですが、前商の生徒はいつも抑えつけられているからなんでしょう、授業の反応はすこぶる良かったですね。よく聴いてくれました。

平野:具体的にはどんな話をしたのですか。

永井:その時々話題になっている問題を取り上げて話をしましたね。生徒たちは駅で狭山事件とか原水爆とかのチラシをいっぱい貰ってくるんですよ。私が授業に行くと黒板にそれが貼ってある。(大笑)今日は授業ではなくてこの話をしろとでもいうようにネ。(大笑)それから、街の中でデモ行進などをすると私を見つけて頑張れって感じでよく手を振ってくれましたね。私が街頭で演説していると寄ってきて話を聴いてくれましたし、理解もしている様子でした。特に「ハンセン病国家賠償訴訟」の話などはよく聴いてくれ、励ます集会には生徒たちも来てくれて力になってくれました。

平野:先生がハンセン病訴訟を支援する会の事務局長になられた経緯はどんなだったのですか。

8. 朝鮮への加害責任とハンセン病問題 —最終解決が私のライフワーク—

永井:それは授業とは関係ないのですが、日朝協会にはいつから関係が出来まし

た。日朝協会には富所陽子事務局長と萩原慧さんからの誘いで入りました。自分の個人的体験としては、サッカーのワールドカップで日本が韓国に負けたとき、廊下で二年生が、「チョンに負けやがって頭へくるやなあ」というのが聞こえたのです。前橋には朝鮮学校がありますが、いままでも朝鮮人が怖いとか朝鮮人はいつも固まって登校しているとか、そういう話はずいぶん聞いていましたが、「チョン」という言葉を聞いたのは初めてでした。ショックでした。「普段からチョンという言葉を使ってるんか」と聞いたら、使っているとのことでした。先生方も「バカチョンカメラ」と平気で言うじゃないですか。当時前商には在日朝鮮人の子どもたちが相当数いましたから、朝鮮人差別の問題を授業で取り上げなければと考えるようになったわけです。それらがきっかけだったと思います。それで生徒に聞いてみたらあまりにも朝鮮のことを知らないのですね。榛名高校では朝鮮問題は扱っていませんでした。私が朝鮮問題を授業で取り上げたのは10年位前ですから、今日来ている前商卒の皆さんも聞いていないと思います。私だけでなく、日本が広島・長崎の原爆で酷い目にあったという被害については誰でも話していると思うのですが、日本が戦前に中国や朝鮮で何をしたのかについて話していない教師は多いのではないのでしょうか。日本人の戦争被害はずいぶん語ってきたけれど、加害については90年代

の初めまではあまり語っていなかったように思います。そういう反省が私にはありました。

あるとき、日朝協会のメンバー何人かで草津に旅行に行ったのです。で、午後に楽生園を訪ね、ハンセン病回復者の冨雄二さんや鈴木幸次さんたちの話を聞き衝撃を受けました。もし彼らの話を聞かなければ、今でも偏見を持ち続けていたかもしれません。それは、冨さんたちが裁判を始めてですから、私が知ったのは98年です。それがきっかけですかね。ハンセン病のことを本当に知れば誰でも、自分たちも何かしなければという気持ちになってくれるでしょうね。吉幸かおる先生もその時お昼に温泉に浸かって「こんなにいい旅行はないわ」と満足げだったのですが、午後、ハンセン病回復者の話を聞いて「言葉を失った」と言っていましたね。彼女も献身的な活動を続けているお一人です。

平野:いまは日朝協会とハンセン病回復者の問題がライフワークになっているのですか。

永井:そうです。朝鮮人の方もハンセン病回復者の中にいるに違いないと考えて日朝協会で伺ったのです。いま、朝鮮人に対する加害責任とハンセン病回復者への差別と迫害を何とか解決したいという思いですね。

平野:話はずいぶん伺いたいのですが、今日は大勢の方がお見えですので、このあと、フロアの方々からのお話を伺

っていきたいと思います。どなたからでも結構ですのでよろしくお願ひします。最初は榛名高校の卒業生にお願ひできますか。

9. いまも聞こえる「ヨイトマケの唄」

—永井先生と共に—

大和敦子(旧制柄沢)さん:ソフト部で3年



間お世話になりました。お蔭様で良い仲間に恵まれ、いまでもお付き合いさせて

いただいております。今日のお話の全ては聞いておりませんが、お母様の話とヨイトマケノ唄は合宿の際に聞かせてもらったことを懐かしく思い出しました。いま榛名高校は1学年2クラスしかないようですが、当時は5クラスありまして榛名中学から上がる子が7、8割いたと思います。あとは倉渕地区とか高崎地区から来ていましたかね。でも、圧倒的に地元でした。でもいまは榛中から行く子がほんの一握りになっているようで、何か寂しい感じがしています。昔は良かったと振り返ることもあるのですが、私の息子も今年高校へ上がったので榛名中学での学力格差を身をもって体験し、底上げの教育の大切さをしみじみ感じました。

先ほど、高崎地区から榛名に来ると恥ずかしい気がし、逆に榛名高校の制服を

着て高崎に行くとは恥ずかしい気がするといわれました。でも、現実には榛名中学から榛名高校へ入らない子がたくさんいるのです。榛名高校を軽く見て、高崎の方へ行けばよい学校に行っているというふうに見られる傾向があるようです。私たちが在学中には先生たちのご努力はよく見えていませんでしたが、自分が親の立場になりますと、良い先生にめぐり合っていたんだということが良く分かりました。

須田弘毅さん:前商のときに永井先生に



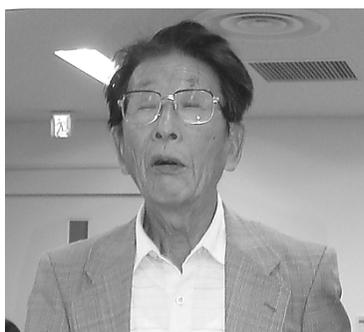
担任をしてもらった須田です。今日いろいろ話を聞いて、先生も当時は大変だったんだなあ(大笑)ということがよく分かりました。自

分はいま、ちょうど40歳なのですが担任になったとき先生も40なんですよね。それにしては先生ちょっと老けていたな(大笑)と感じています。でも、先生とはすごく近い感じで付き合いもらいました。自分たちのときは水曜と土曜は4時間で終わるので、きまってOの家にマージャンをしに行くのですが、自転車を漕いでいると後ろからスカイラインに乗ったサングラスをかけたオッサンが「おーい!」と呼ぶんですよ。あれえ、見ちゃいけないと思ひながらも(笑)振り返るとやっぱり永井先生なんですよ。どこに行くんだと聞くからOのところだと

いうと小遣いをくれるんですよ。(笑)先輩であり、兄貴的なところもあり、担任でもありで2年間お世話になりました。で、社会人となり、営業を担当していたのですが、行き詰って永井先生に相談に行ったら、じゃあ、前商の事務長のところに挨拶に行くかと連れてって来て、仕事につながったりしまして、いろいろな面で近い付き合いをしてもらっています。これからもよろしくお願いします。<やっぱりねえの声>

原田覚次さん：

私は同僚ではないのですが、榛名高校のすぐ傍に住んでいます。昔、中学の教師をしていましたが、同僚に会うと昔の榛名高校にはいい先生が多かったねと話しています。しかし、今話を聞いていると、いい先生が集まってきたのではなく、いい先生になっていったようですね。私の小学時代の友達が榛名高校で用務員さんをしており、家の前の榛名の教師用住宅を掃除に来るのですが、その度に「榛名の先生は良いやい」と言ったものです。私は最後に箕郷中学に行ったのですが、今度はその傍に永井先生の家がありました。で、小中学校の民主的な先生が集まって、夏休みに算数・数学のできない、落ちこぼしてしまった子どもたちを集めて勉強を教えようじゃないかということ



になって、永井先生の奥さん(晶子さん)にお願いしました。

10数人の先生方が教室の後ろに陣取り授業を見学しました。生徒は20名くらいいたと思うのですが、私たちは後ろで授業を聞きながらその見事な指導振りに舌を巻いたものです。そうか、こう教えれば生徒が分かるんだな、こんな教え方もあるんだとずいぶん教えられました。一段落すると、みんなが出て行って、個別指導をします。するとこんな質問が飛び出すのです。「分数の割り算というのはどうしてひっくり返してかけるの？ひっくり返してかけることがどうして割ったことになるの？」「どうしてマイナスとマイナスをかけるとプラスになるの？」こういう私たちには当たり前と思っていたことを次から次に聞くのです。聞かれると子どもたちにわかるようには説明できない。それを永井先生の奥さんは的確に教える。そうすると、子どもたちの数が日に日に増えていったのです。永井先生は数学が苦手だと言いましたが(笑)、奥様の手腕はそれはそれは見事で、今でも感謝していることを是非お伝えください。

大河原さん：今日は先生のいい話を聞きに来たんで、<永井：実は大河原君は榛名高校の卒業生で、群馬県警に勤めていました。例の“裏金”問題で告発したためにある事件をでっち上げられ解雇され、その不当性を訴えて闘っています。皆さんにも知ってもらおうと来てもらいました>榛名高校の思い出だけを話

して失礼しようと思っていたのですが、永井先生がそうおっしゃってくださいましたので、少ししゃべらせてもらいます。

永井先生にもお世話になって裁判闘争を続けています。私は昭和44年、1969年に榛名高校へ入学がしました。入学した年に頭髪自由化の運動がありまして、上級生から入学式が終わって先生



方が退席したら講堂に全員集まれという指示がありました。何があるのかと思ったら、頭髪自由化で、これは実現しました。卒業の年には浅間山荘事件です。榛名高校では古い校舎が壊されて、体育館が出来て部室がなくなってしまったのですが、宮沢加十先生が鮎を食べさせて先生方が楽しんだ教官室を剣道部に譲ってくれました。下の意見が通るとい学校だからこんなこともできたのかなと今話を聞いていて思いました。そういう自由な意見を言える環境の中で育ってきて県警に入ったのですが、裏金問題、皆さんの名前を勝手に使って情報提供者を作り上げて、報奨金をプールしていたという事件ですね。それに文句を言いましたら、

左遷され、それ以来私生活も監視を受けてある事件をでっち上げられ、5年裁判をやっています。最初は人事院に審査してもらえば簡単に取り消されるだろ



うと思っていました。でも、人事委員会は行政にすっかり取り込まれてしまっていて、そんなに簡単なものではありませんでした。裁判所も国の機関

ですので、心配です。今の警察は裏金事件も不祥事ですが、ノルマによる意味のない検挙、例えば、放置自転車を片付けないで、乗った高校生を窃盗罪もしくは遺失物等

横領罪で捕まえるなど、点数稼ぎばかりしていますね。愛媛県では私と同様な裁判している方が今年定年退職してしまっていて、私はいま55歳なのですが、警察に戻していただければ、民主警察になるようにまだまだ力を出せると思いますので、裁判の応援をよろしく願いいたします。榛名高校の先生方も傍聴に来ていただいているのですが、是非皆さんも傍聴においでくださって、私の裁判がどういものか知っていただければと思います。貴重なお時間をいただきありがとうございます。(大拍手) 今日懐かしいお顔とお会いしましたが、名前と顔が一致しなくて失礼しました。ごめんなさい。

(大笑)

内田宇吉さん:感想ですが、今まで苦勞の多い人生をお送りになっているようですが、後悔はしていないように聞き取れました。というのは、わが道が正しいと信じているからだと思うのです。大河原さんも同じだと思います。私も永

井さんのお兄さんと同年齢ですから、この先そんなに長いことはないと思っているのですが、振り返ってみて、そんなに立派な生活をしてきたわけではないけれど、後悔はしていません。貧しかった話にしても、私の子ども時代も昭和恐慌で、100年に1度の不景気で、小遣いは貰えずボロの服を着て、麦飯の弁当で、勿論貧しいより豊かなほうが良いに決まっているけれど、貧しい生活を体験していることが反って儉しいながらも不自由のない生活のよさを感じることが出来るのも真実だと思います。ゆたかな人生というのはいろいろな変化を体験することであると思うようになってきました。日朝協会やハンセン病回復者の運動で一緒にさせてもらっていますが、普段は聞けない話を聞かせてもらったので一言感想を申し上げます。

坂本春夫さん:私は永井さんとは榛名高



校で同僚でした。先ほど回覧された読書会のレポートを見ましたら、そうそうたるメンバーが名

を連ねていましたが、その皆さんもおそらく知らないエピソードを二つご紹介します。私は榛名高校には7年おりましたが、最初に赴任したときにはほぼ民主化は実現しておりました。萩原先生が私に「榛名分会は学校運営に責任を持ってい

る。だから一緒にやりましょう」とおっしゃいました。そのとき、永井さんは一年生の担任をしていました。私は副担任で、2年目からは一緒に担任しました。永井さんは77年には担任をしながら本部の常任執行委員をしていました。特に三年生になると、5クラス中1クラスは進学中心のクラスにします。その他の4クラスは雑多なクラスです。「坂本さん、しょうがないけど大変なクラスを持つしかないよね」といって、3組、通称「デブのクラス」の担任になりました。生徒が永井さんのクラスを「デブのクラス」と呼んだんですね、永井さんは太っていましたから。(笑)当時群馬高教組では火曜日と金曜日に常執会議が設定されていて、永井さんは朝から学校にはいません。そのほかにもスケジュールが混みますともっといい週もありました。その頃の話です。永井さんが出張している日に永井さんのクラスに行ったのです。すると生徒の一人が「今日はナガイがないからちったあちゃんとやんねえとまずいやな」というのが聞こえ、聞き間違いかとわが耳を疑いました。(大笑)「うるせえナガイがいねえから羽根伸ばそう」なら分かるのですが、反対のことをいって、みんな普段よりきちんとしているのです。これには驚きましたね。

もう一つは授業中の話です。私は永井さんのクラスに出ていたのですが、あるとき、雑談めかして私の永井評をやったことがあるのです。そうしたら、クラス

中がシーンとしてしまい、悪ガキたちが涙をポロポロこぼしながら聞き入っているのです。私は口下手ですから名調子の話はできません。悪ガキたちに「きちんとやろう」と言わせ、ポロポロ涙を流させる永井ってのは普段どんな教育をしているのだろうと考えさせられましたね。永井さんの温かな人柄、人間性を逆に生徒から態度で示され、今日もまた確認できた気がしたので、思い切って話してみました。(拍手)

平井敏久さん:私は遠慮深いもので(笑)

発言を控えていましたが、大事なことを教わったので一言発言してみたいと思います。私の初任校は万場高校でした。この地域は保守的などころでした。で、転勤先が榛名高校で、先ほど坂本さんが話されたような職場でしたのです。すごい学校があるものだどびっくりしました。これは私の宝物なのですがくと、ポロポロになった日焼けした古紙を広げて、榛名分会と学校長との「申し合わせ確認事項」を印刷した文書です(スタッフ:巻末に資料をつけました)。学校運営、研修、年休、会議の運営、事務関係の勤務、その他ですが、これに沿って学校作りをするということを毎年校長と確認しあうのです。行った当初は分からないままに永井さんたちの指導を受けていましたが、榛名高校で私は育った、



初めて「教員になれた」と思いましたね。まあ、育ちきっちゃいませんかね(大笑)。いまでも飲んだくれですから、育ったとはいえないかもしれませんが、(教師の)端くれとして頑張っただけでこられたように思っています。それからこれは、私が行って3年目くらいでしょうか、近くの温泉でやった分会教研の資料ですが、永井さんが昭和40年頃から今日までの榛名分会の主な闘いというのをまとめて、名は体をあらわすといいますが丸ッポチャの字で(笑)書いているのです。これには私の

書き込みがいっぱいしてあり、いかに大事なものであったかがうかがい知れます。その中心に永井さんがドーンと坐っていました。県教委にとっては良い学校ではなかったようですが、私たちは良い学校づくりに燃えていました。こういうことをやるには一面酒が欠かせないのです。

(笑)永井さんも酒飲みなので付き合ってきた人も多いと思いますが、私もその一人です。行くときには週2、3回は飲み屋さんに行っていましたかね。ただ飲んでいただけなら、よくてストレス解消に過ぎませんが、永井さんはそこで日頃温めている提案をいろいろするのです。これが意外と勉強になりました。それと、新しい酒場を見つけるのが上手くて、何十軒行ったですかね。そういう中で、永井さん独特の温かさによる滑っこい人間関係が出来ていきました。そういう中で多

彩な人材が育っていったのではないかと思います。私はその後、不当人事で前工へ行き、前橋支部で長い間お世話になりました。本当に私の兄貴のような存在で、足を向けては寝られないのですが、お体に十分気をつけていただきたいと思います。（拍手）



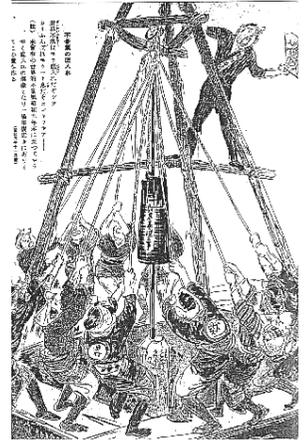
針谷正紀さん：
一つエピソードを。私は永井さんとは同年です。彼が群馬県高校教職員組合の常任執行委員をして

いた時期に私も本部役員をしていました。そこで忘れられない光景が一つあるのです。当時、高教組の組織率は8割を超えていまして、勢いのあった時期です。伊香保の「天坊」で本部の忘年会をしたことがあります。その場で彼が『ヨイトマケの唄』を歌いました。若干の口上も付いたのですが、その場に居合わせた仲居さんたちが全員泣いてしまったのです。これにはものすごい衝撃を受けました。彼の人間的な温かさ、深み、人生そのものを歌を通して身体全体で表現していたのですね。みんな感動の渦の中にいました。（拍手）

フロアから口々に＜最後に歌ってください＞の声、催促の拍手。

平野：これだけ出してしまうと…。唄でめて頂かないと…。

永井：素面で歌ったことがないので…間違えるかもしれませんが、内田さんがヨイトマケの挿絵を用意してくれたようですが、土を固める土方作業で歌う歌です。



（『広辞林』）によれば、“ヨイトマケ”とは、「建築の地固めをする際に、大きなつちの綱を引くときのかげ声。転じて、これに従事する人足。多くは女性」とあります。昭和41年、美輪明宏（丸山明宏）による「ヨイトマケの唄」がキングレコードから発売、大ヒットしたのですが、この「ヨイトマケの唄」が間もなく放送禁止となりました。歌詞の中にある“土方”という言葉がいけないという理由からでした。

お袋も、先ほど言いましたように、こういう作業をずっとやっていたのを覚えていまして、悪いことはするな、頑張っ生きて、お袋が私に伝えたかったことを、そして皆さんが大事なことを伝えて、語り伝えていくというこの会の趣旨の一環として、「カアチャン、オレはやってるよ」という報告の意味をこめて歌います。

お父ちゃんのためならエンヤコラ
お母ちゃんのためなら エンヤコラ
もひとつおまけに エンヤコラ

1. 今も聞こえる

ヨイトマケの唄
今も聞こえる
あの子守唄
工事現場の昼休み
たばこふかして
目を閉じりゃ
聞こえてくるよ
あの唄が
働く土方のあの唄が
貧しい土方のあの唄が

2. 子供の頃に小学校で

ヨイトマケの子供
きたない子供と
いじめぬかれて
はやされて
くやし涙に暮れながら
泣いて帰った道すがら
母ちゃんの働くところを見た
母ちゃんの働くところを見た

3. 姉さんかぶりて

泥にまみれて
日にやけながら 汗を流して
男に混じって ツナを引き
天に向かって 声をあげて
力の限り 唄ってた
母ちゃんの働くところを見た
母ちゃんの働くところを見た

4. なぐさめてもらおう

抱いてもらおうと

息をはずませ 帰ってはきたが
母ちゃんの姿 見たときに
泣いた涙も忘れ果て
帰って行ったよ 学校へ
勉強するよと言いながら
勉強するよと言いながら



5. あれから何年経ったこ

とだろう
高校も出たし大学も出た
今じゃ機械の世の中で
おまけに俺はエンジニア
苦労苦労で死んでった
母ちゃん見てくれ
この姿
母ちゃん見てくれこの姿

6. 何度か俺もぐれかけたけど

やくざな道は踏まずに済んだ
どんなきれいな唄よりも
どんなきれいな声よりも
俺を励ましなぐさめた
母ちゃんの唄こそ 世界一
母ちゃんの唄こそ 世界一

今も聞こえる ヨイトマケの唄

今も聞こえる あの子守唄

父ちゃんのためなら エンヤコラ

子どものためなら エンヤコラ

会場ではハンカチで目を拭う人々の姿がありました。
(文責：橋本)

◎学校長と分会との申し合わせ事項（1979年3月現在）

（原文は縦書きガリ版刷り）

1. 学校運営に関して

①基本・学校運営については組合（分会）と話し合い民主的に行う。

（一例として一時間外勤務など、特に勤務時間に変更あるときは分会と話し合う）

②各種委員会は公選とする。（運営委員会・予算委員会・議長団・緑化委員会・その他）

③校務分掌・学級担任は希望を優先させ民主的に編成する。

（各自の希望を提出・公開・運営委で調整・職員会議で決定）

（分掌について・正担任は1名とし、担任外、副担任は2名のときもある）

（担任について・新任者は持たない。原則として3年間持ち上げてから休む。

自分のクラスの授業を受け持つ。学年主任は卒業学年を持ったあとは必ず
1年間担任を休む）

④人事については、分会人事委員会と十分に話し合う。

⑤主任の性格・位置づけについては、すでに学校長と確認書が取り交わされている
が、その選出にあたっては公選とする。（学年主任は担任を持つ）

2. 研修について

①研修日を週1回もうけ、半日研修とする。（午後）

（研修は事務、養護、司書、公仕等もその対象とする。）（公仕が宿直を代
行したときは翌日1日）

②通常日は授業終了後、清掃の監督時間以降を自主研修とする。

③いわゆる文部教研については、事前に組合と話し合い、参加を強制しない。

（要項の取り扱いについては、組合と協議してきめる）

④自主研修（県外研修）に対しては研修費5000円（年間1人当たり）

（研修内容については各教科に一任し、規制はしない）

3. 年休について

①年休は「届け」とする。理由は問わない。制約は受けない。届け簿は所定の場所
におく事とする。

②年休は半日単位とし、時間休暇は設けない。（早退のチェックは行わない）

③通院の際は職専免。

4. 出張について（組合関係を含む）

①次の会議への出張は、から出張扱いとする。（事故あれば年休、なければ白紙）

・臨時中央委員会 ・定期大会 ・執行委員会 ・県教研 ・全国教研 ・婦人部役員会

②連続3日間（休日をはさんで）の出張（総体など）後は1日の代休とする。

（2週にわたって日曜日が使われたときは1日の代休。1週は半日の代休）

山岳、土の2時間（手書き追加）

③修学旅行の代休は、出発前日が半日、帰着後に2日とする。

5. 会議の運営について

①職員会議、分会会議はそれぞれ定例とし、隔週に行う。

②運営委員会、予算委員会なども定例とし、全体へ事後報告をする。

③職員会議の運営は議長団が行い、議題の提出は議長団に行う。

6. 事務関係の勤務について

①夏休み中の勤務（日直）は、原則として1/4が出勤するものとする。

②研修は週1回半日とする。

7. クラブ活動について

①クラブは、必修、一般の別なく、1本とする。生徒に説明する必要（手書き）

（クラブについては、別に確認事項があり、出席はとらず、評価はしないこと
になっている）

②クラブ顧問は各自の希望できめる。

8. その他

①統一行動時の報告については、分会長と話し合う。

②県教委に対する主任の内申については、分会長に内容を示す。